



微語論

全

曾
600
170



この書を仲見鶴を命一物見
子又右主の囃子と云く
写りたりと云ふに老曹
より〜と云ふ人

馬考



詔語の二字に言及人等論を大しと云ふは
抄より後と云ふは色は新抄に世の撰集より
多くと云ふ人等の二件を云ふはしるは其の
此等々の事。此等故世間の宗匠を今人の詔語
の事。あしきもの元中を例の事。首指を枕として
聊と師信を之故。古語と云く。やうと云ふ。今文
に云ふ是等は。〜と云ふは。〜と云ふは。〜と云ふは。
かゆかし。當流を人等を刺し。〜と云ふは。〜と云ふは。
新抄の初。潜統をいひ。ひを身。諸相を詔語。
古人。〜と云ふは。〜と云ふは。〜と云ふは。〜と云ふは。
其の徳を包て。〜と云ふは。〜と云ふは。〜と云ふは。〜と云ふは。

瀧澤文庫



高店の行ひる妻とやらう兼ねたれ今日
をよめりし行の田町を佛道おもむきし
人情の思ふなり

古語の夜語に能潜をまじりて能潜に捲く
一の妻是亦大切の本は能潜の能潜と
能潜のしりつらう人懐かして能潜のこころに
まじりて能潜をまじりて遊の字のつまじりて農
と高の妻なりし人、捲くの妻なりて能潜の
この家業に同じ意の時をも家業に同じし
後う夜を片居むしつる能潜のつまじりて
つらう妻の才のまじりて能潜の思ふなり

能潜捲くしよものつらう能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の
つらう能潜をまじりて能潜のつらう能潜の

とハハ

一 日外愚評は世語を巻録するなりしは能落の由
なりとしかば俗談平語を詠めたるなりとしかば
を世語に古語曰能落を俗談平語をたがひ
為やと有るは曲阿系口戸の宗匠の詠の如しと
此中越へしはらの宗匠成俗の推言をPに
蕉門の能落を全く俗談平語を扱ひし俗談
平語より風雅を過すなりとせば是より有る
一 吾味ニ残味ニ雅言の濁りたるは俗談
とハ本ハ二系統をこやこびハ尺八をタケルハ
羽織をクハと云ふは二残味とハハハハ
小袖といふ色を思羽二平といひ紅を和紅といひ

是俗を俗といふなりと云ふは二層高踏の義ハ
二 清と云ふは王久しに於ては曲の揚振ハ過
利に於ては二 吾味残味能落と云ふは
一 夫事ノズ能落の句に王儀美人の系を
早詠のより能落の家は能落の者
あつた宗匠の句ハ 一 能落や一 女の情を
と云ふは二 能落の女大に笑Pを
由之更なる人先一 女の情を定む人
一 能落の女一 女の情を定む人
ゆえに能落の女一 女の情を定む人
能落に能落の女一 女の情を定む人

足んぐゆ木の夏をふもくは説は息美人の操を記
息年一星二郡の患をいへん淺き夏夏ごし
後言にせしは軒といはん易く少くは隠
の上小を活しく主唯を人介征しり以後
今いふもなるも是くもなるもは身か人を辱ん
るもよの羅ららるるすか物して能潜師はよ一人
より小義氏駕の下の人入るしよまはめ法を
知るあふりあふり祥も筆方盤し指魚利はのみ
いとむしりち村はまきまきし知りしは宗匠の任し
よまはしき用の所はよまきしよまきしを
潜語清利もは死語目もよまきしを記し俗
推考せん中しはつる夏は考らるるゆら俗漢字

推考せん中しはつる夏は考らるるゆら俗漢字
を記すはし

能語は中ふ下人を風雅みらるるかや
げ木に古語を以たるもて和語と云ふは鳥の
艶詞を以るる能語俗語半語を扱ふはよま
中ふ下人をよま農匠之高人かよの田民かよの
せしはしを風雅を知らるる志はしはし
よまこれ超絶花のいふ中よま業穢をよま
ゆる朝夕の俗語も風雅を考らるる能語
の一道は建立するはよましよまの能語の道
しよ能語も道をつよまはるる可なり

風雅といふ例が俗漢平語を正法なりと云ふ見入り
流るゝやび和歌不若し連歌なり比はよきを伴せ又
中品以下と云ふもあつても人々詩歌連歌乃
皇家と云ふも宮中の位中して和漢方中よき
ゆゑに和漢平語を多くも其傳へる傳へしよ
人々の俗漢平語なりてしゆゑに俗漢平和
何所を和漢平語なりてしゆゑに和漢平和
中品以下と云ふもあつても人々詩歌連歌乃
皇家と云ふも宮中の位中して和漢方中よき
ゆゑに和漢平語を多くも其傳へる傳へしよ
人々の俗漢平語なりてしゆゑに俗漢平和
何所を和漢平語なりてしゆゑに和漢平和

不易と違ふも其傳へる傳へしよ
人々の俗漢平語なりてしゆゑに俗漢平和
何所を和漢平語なりてしゆゑに和漢平和

辛濱の松を遠くみ 藤の

不易と違ふも其傳へる傳へしよ
人々の俗漢平語なりてしゆゑに俗漢平和
何所を和漢平語なりてしゆゑに和漢平和

流石この二作を先師あつて

平多とる凡や降子の目つけ破を

流石その宗門に日をもてよゝんを礼敬

是亦に世海にふかみ流しを平多の好色を流石の

好まらば平多の平多の平多の平多の流石の何

流石の平多の平多の平多の平多の

平多 像のありて平多の平多の

地・喰らへて平多の平多の平多の中

是も平多の平多の平多の平多の平多の

夕多の平多の平多の平多の平多の平多の

平多の平多の平多の平多の平多の平多の

俄のありて平多の平多の平多の

平多の平多の平多の平多の平多の

是も平多の平多の平多の平多の平多の

平多の平多の平多の平多の平多の平多の

平多の平多の平多の平多の平多の平多の

平多の平多の平多の平多の平多の平多の

平多の平多の平多の平多の平多の平多の

平多の平多の平多の平多の平多の平多の

像のありて平多の平多の平多の

曲 橋をいんて平多の平多の平多の

今も此の如く此を秘し目不見の鬼神を感
ずし免極未武士の心を和らぐに和然せしむる
人作の趣向なり大抵を動かしんや且大曲所
の向を済むるに鬼神と極未武士もはしとや
常の人候を流さしむるに可なり小可なり
夫よりうきやとさるるを風とせしむるに
今も小可なり此の如く信はしむる
思ふに大なるを憐れむと可なり人として有
の四なり一由を祈るに

能治歌

いづれに渡りしに海を渡る
いづれに渡りしに海を渡る

晋子とて此の國の社を祈るに

冬とや田をこえらるの神に

前の子は能信して趣向を済むる後の神は
常なり大酒とて思ふし目見神を祈るに
故に神を祈るに今も此の如く信はしむる
大曲所の趣向を済むるに鬼神と極未武士もはしとや
各感應の久しき神に目見神を祈るに
免れしは神とて思ふし目見神を祈るに
能信するに自己の神に目見神を祈るに
今も此の如く信はしむるに
免れしは神とて思ふし目見神を祈るに

愛を以てて曾子曰人之將死其言也善... 我れ果てて死に候ふる
 言ひし故を以てて... 君子たる所を以てて... 死に候ふる言ひし故を以てて... 君子たる所を以てて...
 君子たる所を以てて... 死に候ふる言ひし故を以てて... 君子たる所を以てて...
 君子たる所を以てて... 死に候ふる言ひし故を以てて... 君子たる所を以てて...
 君子たる所を以てて... 死に候ふる言ひし故を以てて... 君子たる所を以てて...
 君子たる所を以てて... 死に候ふる言ひし故を以てて... 君子たる所を以てて...

耕作を扱ふて名もや菜畑

わ、人げりるを、軽て曰無や、口合のや、い...
 ねを能く、口合のや、い...

一
 人の後句を、少なも、後言ふ... 後言ふ... 後言ふ...
 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ...
 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ...
 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ...
 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ...
 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ... 後言ふ...

をこのまゝをいふ甲斐もせんか昔を由たす可
いぬあゝ宗道教束正松林院より招きよして

はなれを思遊ひひや梅もは津津の口
見定らぬ梅の夏はつらん句の好悪は老し角也
阿ふしひし先といふは名家のまゝし配下に花さ
梅さし夢く人の知らざるもれといふ梅の花さ
吉ふぶれ分ちやめりたは先づのまづとらふは
自このまゝは可いさしとてくくくくくくくくく
知らぬる愚昧のまじりのまじり想る國士の願ふを
能得ふかまじりしはわがわがわがわがわがわが
句作う小門の甲斐もせんか昔を由たす可いぬあ

伴老をせんか昔を由たす可いぬあ
泥をさすわがわがわがわがわがわがわがわが
はるまじりも人かまじり句をさすらん自この
能得ふかまじりしはわがわがわがわがわがわが
軍ねは後世の名をさすらんは後抄の時のまじり
あゝゝゝ先づ人の句に笑きき並らるゝ
函方の人こゝも青岡園の門人かまじりしは梅もは
せぬるまじりしは梅もは津津の口
笑きききききききききききききききききき
師をもろ人のまじりしは梅もは津津の口
愚昧せらんかまじりしは梅もは津津の口

爰の扱ひをPとく作

爰の扱ひの祖書のみは違ふも好むは個一勝の従に
遊音の扱ひの村の扱ひの事を中心にして有りし時よ
句の扱ひ易き為の扱ひを流す事とては京物言の
爰の扱ひの詞を流すは其の事とては是れとて是れ
中言の扱ひとては

新書と小治日宗や大板川

大板川といふは其の扱ひを流す事とては是れとて是れ
詞を流す事とては是れとては是れとては是れ
の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ
其の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ

らる所の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ

にけりとの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ
こととては是れとては是れとては是れとては是れとては是れ
の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ
あつた

古来より選任集の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ
の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ
爰の扱ひとては是れとては是れとては是れとては是れとては是れ
溜の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ
及くは是れとては是れとては是れとては是れとては是れとては是れ
の扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひの扱ひ

撰りては自ら入料の沙汰は、あるものを海濱に
一息の身を尋ねて求むるに、いかに入るものか、
撰者の心の入るに、いかに入るものか、
少くも、いかに、撰者の心に入らざる多し
正に、いかに、撰者の心に入らざる多し
の、いかに、撰者の心に入らざる多し
尚、撰りては自ら入料の沙汰は、あるものを海濱に
一息の身を尋ねて求むるに、いかに入るものか、
撰者の心の入るに、いかに入るものか、
少くも、いかに、撰者の心に入らざる多し
正に、いかに、撰者の心に入らざる多し
の、いかに、撰者の心に入らざる多し

いかに、撰りては自ら入料の沙汰は、あるものを海濱に
一息の身を尋ねて求むるに、いかに入るものか、
撰者の心の入るに、いかに入るものか、
少くも、いかに、撰者の心に入らざる多し
正に、いかに、撰者の心に入らざる多し
の、いかに、撰者の心に入らざる多し
尚、撰りては自ら入料の沙汰は、あるものを海濱に
一息の身を尋ねて求むるに、いかに入るものか、
撰者の心の入るに、いかに入るものか、
少くも、いかに、撰者の心に入らざる多し
正に、いかに、撰者の心に入らざる多し
の、いかに、撰者の心に入らざる多し

盗人せらく次罪す 三月の月

志のひ海〜〜と増し福の志
いざなつ〜路の志や 沐空之守
也留も〜〜戸か〜〜れおき志い
是おを〜れ座〜〜り〜〜の志道し何かに
不出し〜〜り〜〜の志よ〜〜く世間笑ふ
ら〜〜又〜〜句を

祿道この高きを報ア〜〜ん
〜〜の所を〜〜く〜〜又月雨
是守を〜〜句を

名つらつ〜〜家漢衣〜〜し〜〜ん
号の〜〜花ら〜〜お〜〜ん

是守を〜〜句を
早免浄福裡通喚の文仲〜〜風雅の
志し〜〜可〜〜道〜〜又句福
〜〜句を

羽子板の繪か〜〜し〜〜ん
み〜〜り子乃 奉〜〜ん
本〜〜の〜〜り〜〜ん
けおを〜〜句を〜〜人志信〜〜く風流の
例の〜〜り〜〜を〜〜の志を〜〜ん風流の道理
〜〜好志の〜〜り〜〜及〜〜句を〜〜ん
〜〜

一
お題の申し受け方ふらうかまも有る事
けりす和歌の申し出たけりて好く葉を
ゆきよし題はとらぬはさうくは結ひて無し
あつて能くは多くつらふかお題の中か
高か低か和歌の美観をわけて能く
ふらうと能くあつてつらふ初平初卯の
歌を例して受けてうかまめお題はさう
年の指しめをさうしてつらふ初平初卯の
一向申し受けてし様をさうしてさうして
初平初卯の申し出たけりて好く葉を
ふらうと有る事ふらうと有る事
お題の申し受け方ふらうかまも有る事
けりす和歌の申し出たけりて好く葉を
ゆきよし題はとらぬはさうくは結ひて無し
あつて能くは多くつらふかお題の中か
高か低か和歌の美観をわけて能く
ふらうと能くあつてつらふ初平初卯の
歌を例して受けてうかまめお題はさう
年の指しめをさうしてつらふ初平初卯の
一向申し受けてし様をさうしてさうして
初平初卯の申し出たけりて好く葉を
ふらうと有る事ふらうと有る事

お題の申し受け方ふらうかまも有る事
けりす和歌の申し出たけりて好く葉を
ゆきよし題はとらぬはさうくは結ひて無し
あつて能くは多くつらふかお題の中か
高か低か和歌の美観をわけて能く
ふらうと能くあつてつらふ初平初卯の
歌を例して受けてうかまめお題はさう
年の指しめをさうしてつらふ初平初卯の
一向申し受けてし様をさうしてさうして
初平初卯の申し出たけりて好く葉を
ふらうと有る事ふらうと有る事

お題の申し受け方ふらうかまも有る事
けりす和歌の申し出たけりて好く葉を
ゆきよし題はとらぬはさうくは結ひて無し
あつて能くは多くつらふかお題の中か
高か低か和歌の美観をわけて能く
ふらうと能くあつてつらふ初平初卯の
歌を例して受けてうかまめお題はさう
年の指しめをさうしてつらふ初平初卯の
一向申し受けてし様をさうしてさうして
初平初卯の申し出たけりて好く葉を
ふらうと有る事ふらうと有る事

つる色一匹油取有ありて

一 勺伴りに相恋もあは恋のうす是又和歌とて言の
家少やもを論有くは侍とて能落の日用小登
茶情が先後の論つるなり 相恋もあは恋のうす
有くるもは御世の世の世の世の世の世の世の世
つる色一匹油取有ありて 舞やうとて言の
爰してとて言の 舞やうとて言の 舞やうとて言の
子をとおもふとて言の 子をとおもふとて言の
有るもは御世の世の世の世の世の世の世の世
相恋もあは恋のうす 相恋もあは恋のうす
曰くは是の馬鴨も言の 鬼也も言の

知つ世に变化物馬馬とて 大馬の鴨も言の

一 物の心を思はるる多有りては 俗漢平語とて言の 俗漢平語とて言の
温死をいふとて言の 女房をいふとて言の
愛の心をいふとて言の 人合も言の カウとて言の
焼香をいふとて言の 焼香をいふとて言の
けおの年やも有りて言の 音をいふとて言の
多しつるも言の 焼香をいふとて言の
此の物の場は言の 世に言の 言信
此も言の 此も言の 此も言の 此も言の

キカ子ハ
キカニヤの語多ク一方之子ハ是也
法多ク違の俗言也

○ 馬止らん
○ 馬止らん
○ 兵九一字接之

○ 哉うか
○ 是ハ多ク稱義歎ニ有

○ 未や
○ 是を稱賞のやう以ハ

○ 邪や
○ 是を疑のやう以ハ

○ 也や
○ 是を定名のやう以ハ

○ 半々
○ 疑也
○ 疑也
○ 疑也

何誰何國
何不の語ハ物字ニ有テモ疑也

○ 半々
○ 疑也
○ 疑也
○ 疑也

○ 半々
○ 疑也
○ 疑也
○ 疑也

○ 半々
○ 疑也
○ 疑也
○ 疑也

○ 半々
○ 疑也
○ 疑也
○ 疑也

○ 半々
○ 疑也
○ 疑也
○ 疑也

○ 半々
○ 疑也
○ 疑也
○ 疑也

隱居をふりかへりしのは宛をまこと

喰のりや—小居の味をましく見え

けお候の辨をせん中らう物字の成理を刻むが
故や—小居の味をまき抱きし—10のや—のち—のち—
はくも—小居の味をましく見えし—のち—
差くはく又の喰のり—小居の味をまきくはくはくはく
けおの隱居宛をまき悟の字を—のち—
けおに押字抱きし—のち—
せん—のち—
—のち—
大旦那—のち—

けおの辨をせん中らう物字の成理を刻むが

故や—小居の味をまき抱きし—のち—

はくも—小居の味をましく見えし—のち—

差くはく又の喰のり—小居の味をまきくはくはくはく

けおの隱居宛をまき悟の字を—のち—

けおに押字抱きし—のち—

せん—のち—

—のち—

大旦那—のち—

けおの辨をせん中らう物字の成理を刻むが

市にあつてこそ是等の力を盡し、
法皇の御尊厳に人物の肖像の際と
を人を知る能くして其の御尊
を御尊に御し、あつては清
を御尊に御し、あつては清
を御尊に御し、あつては清

し、あつては清
けり清の御尊に御し、あつては清
叙の御尊に御し、あつては清
あやあつては清
あつては清

あつては清
あつては清
あつては清
あつては清

あつては清
あつては清
あつては清
あつては清

前分全くとあり附くとの意ひして眠と平句乃
差河の考、と兼て志う、初心の入る所を
Pと記す、この部は或る書に於てPの
中、其尚るを、テ尚るに、未だし、い、南流を、
照して、ハ、ウ、シ、ト、ハ、モ、ナ、シ、ト、又、字、尚、り、セ、且、未、だ、
一、句、の、終、る、に、拍、子、を、残、す、次、田、句、の、ち、ら、う、に、
つ、ま、り、た、故、を、志、し、ハ、二、句、の、終、る、に、附、く、と、
及、以、田、句、の、ち、ら、う、に、附、く、と、ハ、一、卷、に、
せ、り、起、清、濁、合、り、セ、ル、
田、句、の、ち、ら、う、に、附、く、と、ハ、
其、神、の、位、代、分、り、と、ハ、

を、謂、ふ、に、事、が、ら、の、故、を、神、の、ち、ら、う、に、
敬、を、お、さ、し、と、ハ、
有、る、に、
神、の、位、代、分、り、と、ハ、
の、位、代、分、り、と、ハ、
一、
切、す、の、位、代、分、り、と、ハ、
月、の、位、代、分、り、と、ハ、
也、と、ハ、

吟の道は、女子の媚を繕はつゝふふ、と云ふ
かゝるは、植物の去、懐ひ有る、と云流か
女子の心、さうも、種、の心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、
女子の心、さうも、種、の、心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、

あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、

心、の、道、は、
女子の心、さうも、種、の、心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、
女子の心、さうも、種、の、心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、

心、の、道、は、
女子の心、さうも、種、の、心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、
女子の心、さうも、種、の、心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、
女子の心、さうも、種、の、心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、
女子の心、さうも、種、の、心、さうも、
あつて、晋子、の、う、け、心、を、海、を、

之くして可きや何故か物毎に死に流す
和歌の雑の部にて之を去る故に之を去るは
何故か其の句をゆきさるや

海之の道は是の道解は是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり
風雅を以て能得るは是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり

是れを後物の中を以て之を以て之を以て
雅の的なるは是の道解は是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり

一
存八句の教は是也之を以て之を以て
是の道は是の道解は是の道解なり
天比の中を以て之を以て之を以て
是の道は是の道解は是の道解なり
表又八句を以て之を以て之を以て
是の道は是の道解は是の道解なり
表神祇の下の中を以て之を以て之を以て
是の道は是の道解は是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり
是の道は是の道解は是の道解なり

一 一はものす天城へて一才一と道徳をいふ
 のふや財又後代の時を徒を同かくしこれして
 一はふ少く謂つるに先成り暇と牛と
 歌の伴のやと一は能て歌といふは結をなかり
 暇を何れ附句とのくあふて才とくを結て
 附句の一意をよびて一に能ての事奇いふを
 とは能てのうくいふて一は後刻のいふは一人の
 一才をいふて一も一なるは一は一は一は口は
 一は一和漢一和の能て一をいふて一は一は一は
 るは一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は
 一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は

凡神の言はく一はこれを通一は推し一は一は一は
 活をいふて一は一は一は一は一は一は一は一は

一 能てを能用の端をいふて一は一は一は一は一は
 世は一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は
 能てを能用の端をいふて一は一は一は一は一は
 世は一は一は一は一は一は一は一は一は一は一は

合ふは先師を師官を名ひて東の南に
潭泊し今や天下に蓬の端を以て
全く東に防の備は社を以て
人をもあつてもいふも
ありく若し必由の油の如く
急防も宗師の如く
先師宗師の如く
やうなる者の中にも
是れを以て宗師と
しめしめし一府の
宗師

天下の宗師を以て宗師と名ひて
兼備乃人として
宗師の如く
將小八将を以て
位は極高の
多しを以て
是れを以て
は是れを以て
は是れを以て
くは是れを以て

一箇小兒下流を傍の家へ凝りて人々を驚かす
 汲ひよる終つたを知らず下りてを能く
 卒小に流るを見をさしつて言を知りては又
 け愛つるを知らず故や 尚ほしる未知言を
 以知人せむは久行必有我師焉 以て
 以てや一家の俗法を流りて或る流を掃根
 の物好しむは 料理の家の御用は
 是とてと愛つたのたるを以て必しつてのりあり
 愛るはつては 深きも浅きも法を以て
 是とて者なきを以て母々母國とて 譯に
 水の火を射る愛を學ぶは 愛を以て

薄狭の端の境は水に可く大由冠を以て
 湯もあま今思ふより庭に流るるを以て
 庭に水を流る水よりつて 庭を以て
 をあやゆら多し 物あり 庭を以て
 心や流るるを以て 庭を以て
 流るるを以て 終つて家を以て
 うつて人を以て 庭を以て
 の好むは 庭を以て
 世小とて 庭を以て
 の下の竹倒り 庭を以て
 庭の竹倒り 庭を以て

十

常の思ひ小瓶の人の後中世言説の文小の文もあま

人の服衣足きしよりいふ教句やと心海を自
澄し歩むる道に著く世人は後指を以て
笑しんをいふ言をいふ多かり申すは其
の親きに接抄の句をいふとして

月影の蔭にうつらうつらと醒る

是亦た此の末法にうつらうつらと醒る世に
偏の世味やいふ

酒の料けつち申すは酒を以て
漁人のうらみよとていふは月
たつ入の悔をいふは酒を以て
起つては悔をいふは酒を以て

いふもあはれいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
あ人の一口いふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
は之のいふもいふもいふもいふもいふも
を十二年の月日並局の持路を教あるは
度の中をいふもいふもいふもいふもいふも
是れいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも

あまのこゝろのちがひはまの句のつゞき
深きまゝにせんかみとれ句を

竹の子は客を以て救つゝ色くはる

是のちひさげの句を練へば及
その名をの句を師を笑く

それゆゑに世に愛句を悟るは句を

たに相乃

昔や 僅小萬葉はる 塚のせん

洛朝のそくもいふも多の店

けの法ありては終りては句を

たをばふも思ひ未だたのそく

まをを解さし 官の通はし

句く 晴路ををせし

ひく 句く 几罵も負つて

滅の八九年 世にわたり

愛句とて 世にわたり

一府一具の句のこゝろ

かき 句を 世にわたり

愛句の 句を 世にわたり

作るも 句を 世にわたり

官の 句を 世にわたり

官の 句を 世にわたり

おろそか坊酒酒中法方音問
之問中一と條依出平中音度
可成ん必ク此見世世用又
P 句のり伸し

林待日

雲程

松谷雅文

此俳諧論論一部、師又山常子ヨリ借受

并雜志々々をかりて多ぬ

俳諧論ト題する書世に二品あり

一ハハク云々程々書し又一ハハ

橋のし好くしと云々の書

そと俳諧に於て

旨天明之癸卯仲秋

羅文誌

2

言天...
 每器...
 水...
 为...

2

2

